

# 大阪教育大学附属高等学校平野校舎

## 多面的に“いのち”を考える グローバルリーダーの育成

### 【構想の概要】

本校の構想の目的は、「多面的に“いのち”を考え、判断し、課題の解決に向けて主体的にアクションを起こすことができるグローバルリーダーの育成」である。その目的を達成するため「課題研究・フィールドワークの充実」「全教科におけるアクティブ・ラーニングの導入」「新たな評価法の構築」の3点を研究の柱とした。課題研究では、3つの研究領域「医療・保健」「防災・減災」「格差・貧困」のいずれかからグループごとに研究テーマを設定させている。また、「教科」「課題研究」の指導ツールとして「平野メソッド」を開発、指導の共通性と課題研究の持続可能性を担保している。



対象：全校生徒 360 名

- 「課題研究」(3年間6単位) 1年：日本・大阪に関する研究+国内FW・海外FW(3単位)、2年：アジアに関する研究+海外研修旅行+海外FW(2単位)、3年：“いのち”に関する総括論文の作成(1単位)
- 他者との協働性の重視：チームによる課題研究や教科における主体的・対話的で深い学びにより育成
- 教科・課題研究・海外研修旅行等の有機的な関連：重視する「4つの力」の育成をめざし、「教科」「課題研究」「海外研修旅行、国内FW、海外FW」が有機的に機能する教育課程を編成、全教員が指導
- 「平野メソッド」の開発：「平野メソッド」により学習ゴールの共通理解、指導の統一性を担保
- 評価開発：グローバル人材評価テスト(GPAT)を開発、生徒の変容とカリキュラム全体を評価

## カリキュラムの特徴

### 1. 「教科」「課題研究」「研修旅行等」の有機的関連 ～各教育課程をとおして育成する「4つの力」～

本校では、「教科」「課題研究」「海外研修旅行等」をとおして「4つの力（課題解決力、コミュニケーション力、多文化理解力、セルフマネジメント力）」の育成を目指している。「海外研修旅行等」は、「教科」や「課題研究」の学習の流れに組み込まれており、現地では、研究課題の本質の追究や、考案したアクションプランの実施・発表などを行っている。

### 2. 学校設定教科と課題研究の関連

本校では、学校設定科目「生命の倫理」及び「公共と経済」を設定している。

「生命の倫理」は、ディベートを取り入れながら生殖医療・終末医療に関連するテーマ学習を実施し、論理的思考力やコミュニケーション力の育成に重点をおいている。

「公共と経済」は、社会の仕組みを幅広く学び、課題研究のアクションプランの創出に寄与している。特に、社会課題の解決に向けた考察では、自助・共助・公助という3つのフェーズを学び、個人・地域・行政の関わりについて理解を深めている。

### 3. 教科や課題研究を支えるベースづくり

#### （チームビルディング）

本校では、1年入学後の約1ヶ月を学習全体のベースづくりの期間と位置づけている。他者との関係性の構築について「多様性」と「コンセンサス」をキーワードに、「平野メソッド」を利用したチームビルディングを学ぶ。他者との違い（多様性）を認識しながら、目的集団としてのコンセンサスの必要性・重要性について時間をかけて学習している。その結果、合意形成の

プロセスでは、多数決による短絡的な合意が極端に少なくなり、多様性と合意形成についての認識が高まっている。これらは、「教科」における主体的・対話的で深い学びや、チームで取り組む「課題研究」の推進基盤となっている。

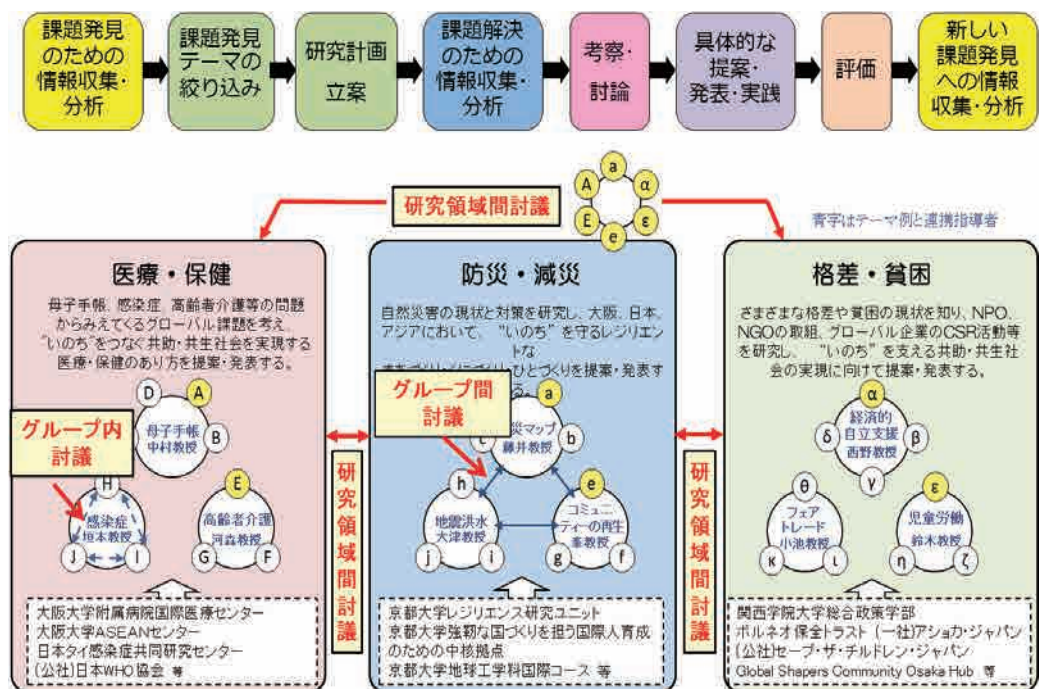
### 4. ジグソー法を効果的に配置した学習

下図は、本校の「課題研究」の学習プロセスと、多重構造のジグソー法による学習方法を示している。PPDAC\*1による研究プロセスを導入し、その中にジグソー法を組み込み、理解の定着と深化をめざす。「課題研究」においては、「研究領域内」と「研究領域間」でそれぞれジグソー法によるディスカッションを行っている。「研究領域内」では各チームのテーマを超えてその研究領域の課題について討論を行い、「研究領域間」では、それぞれの研究領域を超えて“いのち”に関する課題について討論している。このように、課題を多面的に考察する力も高められている。

\*1 PPDACとは課題解決における各段階をProblem（課題設定）、Plan（計画）、Data（データ収集）、Analysis（分析）、Conclusion（取りあえぬ結論）に分けた考え方である。

## 平野メソッド

「平野メソッド」とは、本校の「課題研究」の指導実践をもとに開発した指導法・評価法ツールの総称である（次ページ表1参照）。





ツールの機能	名称と内容
チームビルディングツール	「ディケンシント」多様性を体験するゲーム 「命の写真」多様性を認識しながら合意形成へと向かうためのツール 「NASAゲームなど」立場の認識と選択に関するゲーム
課題発見・原因追及ツール	「強み繋がるネットワーク」興味関心から課題へとつなげるツール 「QFT」問いかけに特化したブレインストーミング 「4QS」素朴な疑問(問い)を検証可能な仮説へ導くツール
情報収集ツール	「情報カード」収集した情報をまとめるカード、課題研究における反転学習ツール
基本ツール	「ミニマムリスト」論文・ポスター発表に必要な項目内容の整理 「逆引きロジックツリー」ミニマムリストの関係整理図
ポスター作成ツール	「課題研究進捗状況表」各グループの課題研究の進捗一覧表(教員指導用) 「ポスターコード36」ポスター発表に必要な項目をルーブリック形式に表現したもの 「ミニマムからポスター作成へのブリッジシート」 論旨を整理し、ポスターにおける内容と配置を決めやすためのツール 「ポスターの各セッションを磨き上げるためのツール」 ポスター作成における具体的な技法を紹介した資料 「ポスター作成後のチェックシート」 作成したポスターで使った技法をまとめて今後の作成に生かすためのツール
評価ツール	ポスター発表のルーブリック 口頭発表のルーブリック

例えば、「ミニマムリスト」は、研究を行っていくうえで必要なプロセス14項目をまとめたツールである。これらの内容について調査や考察を行うことで、生徒が主体的に研究を進めていくことができるようになってきている。これを活用することで、各教員が課題研究の指導のポイントを共有し、生徒の研究の質的担保が可能となった。本校は、学年団3～4名が約30グループの研究を指導しているため、一人あたりの担当グループ数が多い。このツールの導入により、生徒の主体的な活動が進み、少ない指導者での指導も可能となった。

ミニマムリスト

課題研究においてポスターや論文作成に必要な最低限の項目を示し、研究の論理の流れを意識して生徒が研究課程を自己点検、指導と評価の要となるワークシート

課題研究の論理技法を14項目に分類

各種目のサマリーを書き込み式のワークシートでモニタリングでき、生徒のグループ内コンセンサスの浸透率が容易に可視化と評価が可能

14項目それぞれの内容が端的に示され、生徒の達成目標と教員による指導の際の共通指針となる

また、「ポスターコード36」は、「ミニマムリスト」でまとめた研究内容をポスターにするときに使用するツールである。これは、ポスター作成に必要な36の項目を色分けして記しており、「黒色」→「青色」→「緑色」→「オレンジ色」→「赤色」というようにポスター作成に必要な事項を段階的・時系列的に生徒に提示している。はじめは「黒色」で記された項目を、次には少し難しい課題（「青色」）が示される。ポスター作成に必要な36項目を一気に提示するのではなく、「黒」→「青」→「緑」→

「オレンジ」→「赤」の順で課題を示すことで、取り組む内容を明確にさせていく。このツールによって、生徒がポスターの作成過程を理解し、主体的に取り組むようになった。また、教員も指導のポイントを明確にしながら授業に臨むようになった。

### ポスターコード36

ポスター作成の過程を36のコードに分類。さらに指導の時期ごとに到達目標を段階的に明示。カラーコードのステップでポイントが明確になり、緻密な指導が可能

指導の時期に応じて到達目標が一文の中に加算されていく

5枚繰り返しのコードを1枚に集約。教員は色分けされたコードを読み取ることで、現在の到達目標と同時にこれから先の目標がこの1枚で一目で、先を見越した個別指導が可能

生徒は授業発表会の開催に合わせてこのコード分類に基づいて質問することで、議論の質が明確になる

## 教科の学習とSGHでめざす学力の関係

本校では、全教員がグローバルリーダーとして必要な「4つの力」を意識しながら「教科」の授業を行っている。これまで各教科から約30の実践報告があるが、表2はその中からピックアップした授業例と「4つの力（A 課題解決力 B コミュニケーション力 C 多文化理解力 D セルフマネジメント力）」の関係を示したものである。例えば、物理基礎での反転授業の実践では、生徒がより能動的に授業に参加するようになり、問題を解く際に互いに教えあう場面が増えた。また、体育では、KJ法やロジックツリーを活用してゲーム分析を行い、生徒自身がチーム課題を発見し、具体的な練習計画を立てるようになった。

表2「4つの力」の定着をねらった教科学習

教科	単元：テーマ	ねらいとする「4つの力」
国語 総合	「パネルディスカッション」	A・B・D
古典	「4QSによる『土佐日記』の実践」	A・B・D
数学 数B	「円錐曲線におけるピアティエーチング」	B
数I	「校舎の高さを測ってみよう」	A・B
理科 物理	「物理科における反転授業の実践」	A・B
化学	「ジグソー法を取り入れた主体的で協働的な学びの実践」	A・B
地歴・公民	「ルネサンス期の人物・作品についてポスターを作成する」 「課題研究のテーマを歴史的観点からアプローチする」	A・B・C A・B・C
英語	「即興型英語ディベート」 「ショー・アンド・テル(物や写真を見せながら話す活動)」	A・B・C・D A・B・C・D
保体 体育	「オーラルサマリー(教科書の要約を作成して発表する活動)」	A・B・C・D
保健	「チームで戦略をたてて楽しむサッカー」 「多面的に「いのち」を考えるーハンセン病についてー」	A・B・C・D A・B・C・D

## SGHに係る評価指標の開発

本校では大阪教育大学アセスメントグループと連

携し、SGHの各カリキュラムや生徒の変容について調査・改善を行っている。

### 1. 生徒の資質能力変容調査

本校では、生徒の「4つの力」の変容を客観的に評価するために、生徒の認知面（自己をどのように認知・評価しているか）と行動面（課題に対してどのような対応・行動を行うか）の2面から継続的に評価を行っている。

生徒の認知面の評価に関しては、「SGH生徒アンケート」を実施（年1回）することで、1年間の認知面の変容を捉えている。SGH1期生の分析結果では、1年次から3年次にかけて、本校の3つの研究領域の課題に対する「興味・関心」の伸び、「問題を議論・把握できる」といった自信が高まった。また、自分が研究していないグローバル課題に対しても、「興味・関心」や「問題を議論・把握できる」の項目が伸びた。このように、自らの研究内容だけでなく、他の研究内容に関する理解も深まっている。

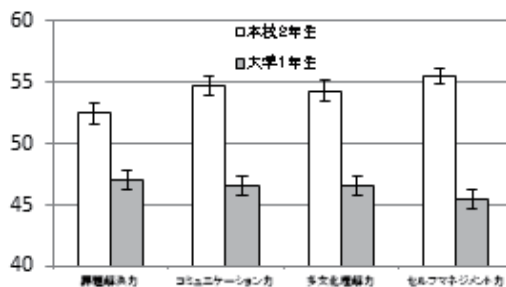
行動面の変容に関しては、PROG調査（知識を活用して問題解決をする力を測る調査）を毎年4月に実施しており、その変容を分析している。PROG調査の評価項目は多岐に渡るが、本校が育成を目指す「4つの力」の中の「課題解決力」「セルフマネジメント力」については、下図の「対課題基礎力」の3つの項目と「對自己基礎力」の3つの項目において変容が見て取れる。

### 2. グローバルリーダーの新たな評価指標（GPAT）の開発

PROG調査における行動特性の観点は、本校の

「4つの力」と関連するものの、すべて一致しているわけではない。そのため、「4つの力」に焦点を絞った本校オリジナルの評価指標（GPAT）を試作し、実施・分析した。

評価問題は「4つの力」のそれぞれの評価項目に対する25問の多肢選択型問題とした。問題例や点数のつけ方に関しては割愛するが、昨年度、本校の2年生と近隣の大学1年生に同じ問題を解いてもらった。SGHの指導を1年半学習した本校生の方が、「4つの力」すべての項目において高得点だった。



### SGH 教員交流・研修会による成果の普及

本校は、毎年、研究成果を普及するため「平野メソッド」や課題研究の進め方を紹介する「SGH教員交流・研修会」を実施している。昨年度は全国から64名の学校関係者が参加した。参加者へのアンケートでは「研修会での情報は今後役立つ」という項目では、「そう思う79%」「どちらかといえばそう思う21%」であった。また、100%の方が「今後もこのような研修会に参加したい」と回答した。

